



Get Back

練：リハーサル
録：レコーディング

編：編集

M：モノ・ミキシング

S：ステレオ・ミキシング

	69 01 02	03	06	07	08	09	10	13	22	23	24	27	28	29	30	02 05	03 10	26	04 04	07	05 07	09	28	70 03 26
<u>Get Back</u>				練		練	練	練			録	録	録	練	録	S	S	M	M S	M S	S	S	編	編 S
<u>Don't Let Me Down</u>	練	練	練	練	練		練		練	録		練	録	練	録	S	S		M S	M S				

[Don't Let Me Down\(YouTube\)](#)

Get Back

作曲 録音 ミキシング 解析 TIPS 収録 記録

[TOP](#)

ジョンに言わせれば「レディ・マドンナの改良版("a better version of Lady Madonna")」で、キャッチーな曲("a potboiler")をリライトしたものである（'80 PBインタビュー）。

1/7、ポールがアコースティック・ギターでリズムを刻みながら鼻歌風に歌い出したメロディーは、ものの1分で本曲のヴァース部分に変化している。その直後には同じコード進行で歌詞も含むサビ部分が繋がれていることから、サビ部分は既に出来上がっていて、そのヴァース部分を創ろうとしていたとも考えられる。

歌詞に登場する"Jo Jo"についてポールは（『Many Years From Now』）、特定のモデルがいる訳ではなく("I had no particular person in mind")、架空の人物("a fictional character")であり、半分男、半分女の曖昧な存在だとしている。

別のインタビュー（『Rolling Stone, 1986』）では、‘Get Back’にはいくつも歌詞があったが決して人種差別主義者ではないと語っている。集合住宅に住む16人のパキスタン人に関する新聞記事があつて、‘Get Back’のヴァースに使ったアウトテイク（"too many Pakistanis living in a council flat"）があるが、（パキスタン人を問題にしたのではなく）過密状態について問題提起をしたものだと言明している。

ただし、リハーサル中の1/23、残されている録音テープにはこの曲を"protest song"と表現しているポールがパキスタン人に関する詞を外した旨をジョージに伝えているらしき場面もある。月末にライブ・レコーディングするという目標を達成する必要がある、真意を正確に表現するには作詞時間が足りなかったようだ。

GET BACK SESSION中の作曲であるためヴァースの作詞にはジョンも初期段階から関わっているが、サビの歌詞("Get back to where you once belonged.")についてはヨーコに対する含みが根底にあるとジョンは感じていた。ジョンに依れば、スタジオでその歌詞を歌う度にポールはヨーコを見ていたと語っている（'80 PBインタビュー）。

なお、リハーサル期間の1/10にジョージが一時的に脱退したため、ジョンがリードギター担当としてリハーサルが進められることになる（詳細は《録音》タブを参照）。

Get Back

作曲 録音 ミキシング 解析 TIPS 収録 記録

[TOP](#)

サビはいつ出来たのか？

1/7のポールの鼻歌がヴァース(Aメロ)のメロディに発展している。この時のヴァース部分はパキスタン人とは無関係で、パキスタン人やプエルトリコ人が登場するのは2日後である。明らかに持ち帰って詞を練り直しているのが分かる。

一方、そのすぐ後には作りかけのヴァースと、完全に出来上がったサビが登場する。"Get back to ~ belonged"はセッション前から頭に入っていた可能性も十分に考えられる。この表現は「平和を実現するための方法論」と捉えたと、マルコムXの"let it be a country of freedom"に通ずるものがある。つまり、争いを生むものは分離しておいた方が良いという思想である。

ただし、パキスタン人を叩いていたNational Frontはファシストだと記されており(『Many Years From Now』)、政治的立ち位置が誤解されるのを回避するためにヴァースを修正したと解釈することもできる。その意味では‘Let It Be’でマルコムXに関する詞を変更したのと、‘Get Back’からパキスタン人やプエルトリコ人に関する詞を避けたのは同じ理由と考えることもできる。

役に立たないドイツ語講座

鼻歌からスタートしたヴァース部分はものの数分で形になるが、歌詞には紆余曲折がある。

その中でも、歌詞が完成していた時期（というか最終的にリリース・バージョンとなる1/27の演奏）より後に余興的に替え歌で歌っている[ドイツ語バージョン](#)はかなり特殊な存在である。「ドイツ語っぽく聞こえる単語の羅列」ではなく、自分たちにとって馴染みのある単語やフレーズを使ってそれらしい文章になっている。

基本となっているのは以下の3種類である。

ドイツ語	カタカナ表記	意味
Geh weg	ゲー・ベーク	"Go away."
Geh raus	ゲー・ラウス	"Go out."
nach deinem Haus	ナッハ・ダイネム・ハウス	"to your house."の意味で使っているが、正しくは"zu dir nach Hause"とすべき

意図的に発音を茶化しているため聞き取れないものもあるが、おそらくデビュー前に覚えた正しいドイツ語と思われる。ただし、日常会話でこれらを使う状況となると穏やかでは

ない。流石はライブ中に Macht Schau!(マッハト・シャウ)と声援を受けていた彼らならではの語彙集である。

Geh weg! (raus!) Geh weg! (raus!)
Geh weg! (raus!) nach einer Nacht, nach Haus
Geh weg, geh raus
Geh raus nach irgendeinem Haus
Geht rasch? nach Haus
Ja, Jacki
Ja, geh weg Jacki
Das war nicht so gut!
Geh weg! Geh weg!
Geh raus nach deinem, deinem Haus
Geh weg! Geht raus!
Geht raus nach irgendeinem Haus!
Geht raus nach deinem Haus!
Ja, das ist gut Jacki
Und sauber? gut, ja!
Und Loretta/Signorita (?) Martin denkt, sie war ein Freundlich,
ja aber das waer' nicht um? sonst?,
So sie sagt nach ? Bill, you be mein Haeuptling
Ah dies'? bleib' ich gar nicht d'rum
Geh raus, geh raus
Geht raus nach deinem mundigen Haus!
Geht raus, geht raus
Geht raus nach deinem freundlich Haus!
Geh raus, Melinda!
Geh raus nach deinem Haus! Ja!
Vielen Dank fuer die Blumen.

シングルは1/27+1/28

前半は1/27に録音した10曲目くらいのテイク、フェイク・エンディング後のリフレイン部は翌日の別のテイクのものを使っている。

この流れでいくと、一応ベストは1/27に録音できたものの、フェイク・エンディングを採用することにしたので翌日に再チャレンジをしてみたようだ。しかし、全体を通して録音することは諦めて、リフレイン部分のベストが録音できた時点で満足したらしい。

聴き比べ表

『THIRTY DAYS Disc 10』 20曲目	比較音源	『MONO MASTERS』
0'00"	0'00"	
0'00"～0'28"：会話		
0'28"	0'28"	0'00"
0'28"～3'01"：演奏		0'00"～2'32"：同左

3'01"		2'32"
3'01"～：会話	3'01"	2'32"～：リフレイン（別テイク）

『THIRTY DAYS Disc 11』 16曲目	比較音源	『MONO MASTERS』
0'00"		
0'00"～0'02"：カウント	0'00"	
0'02"		0'00"
0'02"～2'37"：演奏（本編）	0'02"	0'00"～2'32"：本編（別テイク）
2'37"		2'32"
2'37"～3'53"：リフレイン	2'37"	2'32"～3'08"：同左(フェイドアウト)

音から分かるビートルズ史

結論を先に述べると、アルバム『GET BACK』に使われたのはアメリカ盤シングルと同じバージョンである。

グリーン・ジョーンズは4月上旬に‘Get Back’の[モノ・バージョン（イギリス向け）](#)と[ステレオ・バージョン（アメリカ向け）](#)を作成している。

さらに5月にはアルバム『GET BACK』を制作しているが、この時に‘Get Back’の再ミキシングはせず、アメリカ向けステレオ・バージョンを流用したことになる。

ミキシングをする時に使うエコー等のエフェクトや編集作業に伴うテープを切り貼りした跡は、アナログ作業であるが故に同じ結果を得るのは不可能である。そのため指紋やDNAのようにバージョン特定に利用できる。

4月に作成したステレオ・バージョンはモノ・バージョンとの比較から編集跡が2箇所あるのが確定している。これを『GET BACK』収録バージョンと比較するとエコーと編集跡が一致する、つまり同じバージョンと断定できる。

なお、確認用に使用した『GET BACK』収録バージョンは左右を反転させたのもで、両バージョンの左右を個別に比較してみると単純に逆になっているのが分かる。

聴き比べ表

『THIRTY DAYS Disc 17』		
---------------------------------------	--	--

<u>7 曲目</u>	<u>比較音源</u>	<u>『PAST MASTERS』</u>
同上の L チャンネルだけ	<u>比較音源</u>	同上の R チャンネルだけ
同上の R チャンネルだけ	<u>比較音源</u>	同上の L チャンネルだけ

リフレイン&リプリーズ

アルバム『GET BACK』にはアメリカ向けシングル・バージョン（ステレオ・バージョン）が収録されている。グリーン・ジョンズの証言から、シングル制作時にアルバム収録を想定していた訳ではない。しかし、直後にアルバム制作を依頼された時、ジョンズは再ミキシングすることなくシングル・バージョンを（左右反転させて）アルバム用として流用している。

シングル・バージョンはフェイク・エンディングからのリフレインという展開になっており、リフレインとして使われた 1/2 8 の演奏はポールの"Jo-Jo, Loretta, get back"というセリフでフェードアウトしている。

ところで映画のエンディングでも 1/2 8 のリフレイン部でフィナーレとなる。そこでは逆に"Jo-Jo, Loretta, get back"からフェードインしており、シングル・バージョンとは数秒間重なっていることになる。映画製作との主従関係は不明であるが、『GET BACK』の最後を飾るリプリーズも全く同じ位置からフェードインしている。

結果として『GET BACK』は、1/2 8 のリフレイン部が一旦フェードアウトし、数曲挟んで再びリフレインの続きで締めるという構成になっている。

（何度も"get back"するという意図があったかどうかは不明である）

聴き比べ表

<u>『THIRTY DAYS Disc 11』</u> <u>1 6 曲目</u>	<u>比較音源</u>	<u>『THIRTY DAYS Disc 17』</u> <u>1 5 曲目</u>
<u>0'00"</u> 0'00"～2'37"：カウント～本編	<u>0'00"</u>	
<u>2'37"</u> 2'37"～：リフレイン 2'37"～3'13"：シングルに使用	<u>2'37"</u>	
<u>3'09"</u> 3'09"～3'48"：リプリーズに使用 3'53"：演奏終了	<u>3'09"</u>	<u>0'00"</u> 0'00"～0'49"：リプリーズ

後年の各種リミックス

『ANTHOLOGY 3』

ルーフトップ・コンサートのラスト（映画で警官が登場する演奏）は8トラック・テープ（実質7トラック）をリミックスして『ANTHOLOGY 3』に収録されている。
一方、このコンサート全体もナグラ音源として聴くことができるが、両者を比較するとエレピとベースが小さく、ジョージのギターが大きいことからステージに向かって右側で録音していたらしい事が分かる。

聴き比べ表

<u>『ANTHOLOGY 3』</u>	<u>比較音源</u>	<u>『THIRTY DAYS Disc 14』</u> <u>1 8 曲目</u>
<u>0'00"</u>		<u>0'00"</u>
0'00"～：エレピとベースが明瞭	<u>0'00"</u>	0'00"～：ジョージのギターが大きめ

『LET IT BE NAKED』

『NAKED』収録バージョンはアルバム・バージョン（フィル・スペクター・バージョン）と同じく1/27の演奏のみを使用している。かつ、スタジオや屋上での会話やノイズは加えていない。そして本作の特徴でもある部分的な修正が行われ、エレピによる間奏の4小節目でジョージの弾くギターコードが0'31"のギター音で追加補正されている。

最も特徴的なのはベースの音色変更である。ヘフナーを使つての演奏はその特徴でもある輪郭の丸い音になっているが、ここではエンハンサー（エフェクター）のような効果が施されて芯のある音に代わっている。イントロから続くA音は原音のみで、小さめな音量になっている。その後、ヴァースに入ってDコードになる箇所だけエンハンサーを通した音が加わる。更に続くサビ以降はエンハンサーを通した音が加わりっぱなしになっている。

聴き比べ表

<u>『LET IT BE NAKED』</u>	<u>比較音源</u>	<u>リマスター・ステレオ</u> <u>『PAST MASTERS』</u>
<u>0'00"</u>		
0'00"～：ベースの輪郭を強調	<u>0'00"</u>	<u>0'00"</u>
<u>0'30"</u>	<u>0'30"</u>	<u>0'30"</u>
<u>1'00"</u>		<u>1'00"</u>
1'19"：ギターコードの差し替え（0'31"のG－D）	<u>1'00"</u>	1'11"："Get back, Jo"の前に編集跡

1'30"	1'30"	1'30"
2'00"	2'00"	2'00"
2'30"	2'30"	2'30"
2'32"：フェードアウト		2'34"～：リフレイン

『LOVE』（2006年リミックス）

同じキーAである‘[The End](#)’と組み合わせている。イントロには‘[A Hard Day's Night](#)’のオープニング・コード F add9/D を使っているが、ここではピッチだけを半音下げて E add9 とすることで音楽的にも上手く繋がるようにしている。

『1+』（2015年リミックス）

同じテイク(1/27と1/28)を同じように編集しているが、音のバランスが極端に違っている。

ドラムスをセンターに置いているが、スネアは『1』より小さめになっている。『1』のイントロではスネアがフェードインしていたが、ここでは最初から小さめな上、フェードインすることなく小さな音量をキープしている。

また、ベースやジョージのギターもオリジナルより控えめになっており、フェードアウトが早めで"Jo-Jo"までは聴こえるが"Loretta"は聴こえない。

オリジナルのミキシングについてはジェフ・エメリックが詳しい。

ポールはビートルズのニュー・シングルをPRするためにアセテート盤をラジオでオンエアしてもらったものの、放送された音に不満を持って再ミキシングした話は有名である。エメリックの証言はアセテート盤を作成した時か、ミキシングをやり直した4/7の出来事と思われる。この時、オリンピック・サウンド・スタジオにはマーティンは居らず、ジョンズがミキシングをしているが、エメリックもポールに呼び出されて同席している。

エメリックによると、ジョンズはスピーカーを3つ使い、センターのスピーカーはスネア専用としてバランスを取っていた。それくらいスネアを重視していたはずなのに、『1+』バージョンの意図は何なのだろう？

『THE BEATLES 1』と『1+』の聴き比べ表

<u>『THE BEATLES 1』</u>	<u>比較音源</u>	<u>『1+』</u>
0'00"		0'00"
0'00"～：スネアがフェードイン	0'00"	0'00"～：スネアが小さめ 0'00"～：ジョージのギターが小さめ 0'00"～：ベースが小さめ
0'30"	0'30"	0'30"
1'00"		

1'11" : "Get back, Jo"の前に編集跡	1'00"	1'00"
1'30"	1'30"	1'30"
2'00"	2'00"	2'00"
2'30"	2'30"	2'30"
2'34" : ドラムスの前に編集跡		2'34" : ドラムスの前に編集跡
3'00"	3'00"	3'00"
3'10" : "Loretta, get back"でフェードアウト		3'07" : "Jo-Jo"でフェードアウト

Don't Let Me Down

[TOP](#)

[作曲](#) [録音](#) [ミキシング](#) [解析](#) [TIPS](#) [収録](#) [記録](#)

ジョンは"Don't Let Me Down?" ('80 PBインタビュー)と問われて「僕のだ。ヨーコについて歌っている。("That's me, singing about Yoko.")」と答えている。続いて"Two Of Us?"と訊かれるも、曲名とは気付かずに「共作?」と解釈したらしく「僕の。("Mine.")」と答えて話を続けている。ジョンの解釈では、出版社は気付いていないがロッド・スチュワートは'Maggie May'でパクっている("Rod Stewart turned 'Don't Let Me Down' into 'Maggie don't go-o-o'.")としている。ただし、自分でも同じような事をしているとフォローもしている。

ジョンは多くを語っていないが、ポールはこの曲を「ジョンの心の叫び("a genuine plea", "a genuine cry for help")」だとし、「いい曲("a good song")」と評している(『MANY YEARS FROM NOW』)。ポールは更に、レコーディングでは多くの時間をかけ、自身はハーモニーを付けているが、作詞を手伝ったかどうか記憶はなくやってないと思う、と付け加えている。

実際のポールの貢献はゲット・バック・セッションの録音源で詳細まで明らかになっている。

先ず68年のアコースティック・ギターによるデモが2種類ある。

一つはAメロ部分("nobody ever ~")に別のミドル8を付けようとしているもので、ここでのAメロ部分は'[Nowhere Man](#)'("making ~")と同じ流れの F#m - F#m7 - Am - E というコード進行で歌っている。

もう一つは、Bメロ("I'm in love ~")にAメロ部分をミドル8として繋いだもので、こちらの方が時系列では後になるのだろう。こちらにはBメロの歌詞を使ったCメロと呼べるメロディー(Bm - G - F# - B7 - E という如何にもジョンらしいコード進行)も付いている。

これにタイトル・フレーズのコーラス(サビ)が追加され、Aメロ部分のAmが無くなった状態でGET BACK SESSIONに持ち込まれている。なお、この時点でのサビはCメロがセットで繋いであり、Bメロに似た歌詞"I'm in love for the first time, please don't let me down."に変化している。この原形に対して、ポールはカウンター・メロディーの追加を試したり、サビのCメロ部分を無くしたり、といった修正を加えている(詳細な経緯は『録音』タブ参照)。

この曲の歌詞は、Aメロではヨーコを"she"と表現しているので、「"Don't let me down"と叫ぶ相手は誰?」という疑問がある。上記の作成過程から各パートの作成時期が異なっているのは明らかなので、各時期でのヨーコへの想いを曲にした断片を繋いだため人称が変化していると考えられる。特にAメロでは"she do me"と歌う点もポイントになっているが、"you do me"では意図が伝わらなくなるため変更できなかったと解釈すると、ポールの言う「ヨーコに向けた叫び("It was saying to Yoko")」が妥当なようである。

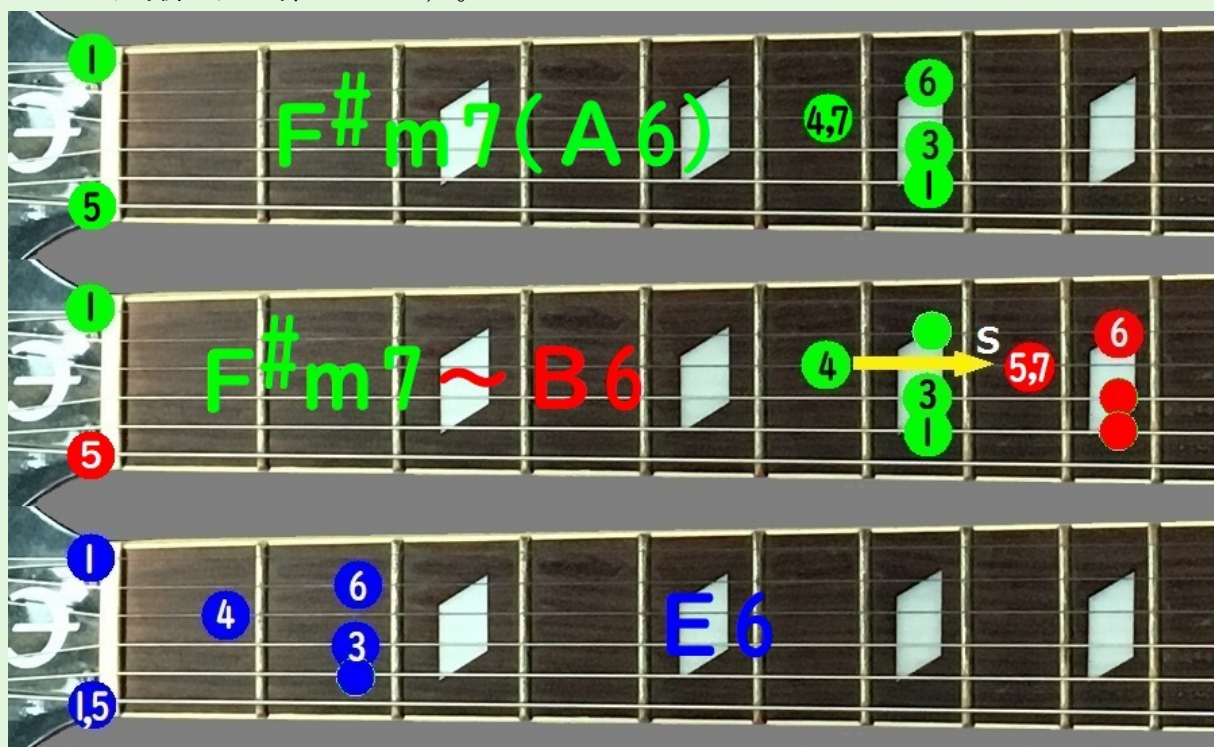
Don't Let Me Down

作曲 録音 ミキシング 解析 TIPS 収録 記録

[TOP](#)

Sun Kingとの関連

GET BACK SESSIONでの有名な誤解に「‘Sun King’を演奏していた」というのがある。実際、『LET IT BE... NAKED』の‘Fly On The Wall’でも"Sun King"と記されている。しかし、この時のジョンは‘Don't Let Me Down’のコーラス部分のコード進行を使ってバックিং用あるいはイントロ用の演奏を検討していたと思われる。初日にこのアルペジオを試しているものの早々に放棄しており、以降は使われていない（ただし、このリフを気に入っていたらしく時折一人で弾いていた）。



GET BACK SESSIONでは『ABBEYROAD』収録曲も多数登場し、このリフも‘Sun King’のイントロやBメロに使われている。つまり順序は逆で、‘Don't Let Me Down’のボツ・アイデアではあるが、後に転用して復活させたものである。

運命の1/2 2（ビリー・プレストン参加）

1/6にはメロディとコーラスが確定し、同時にバックিংの検討も始まる。その日の内にジョージはイントロのフレーズを思い付いている。翌1/7にはベースパターン(3拍目が1/6分音符になる)が決まり、1/9にはAメロのギターフレーズが出来る。

ジョージの脱退騒動明けの1/2 1にはBメロのリフ(ギターとベース)も完成して、1/2 2

にビリープレストンを迎える。

この日が如何に素晴らしかったかはテープに記録されたジョンの様子からも窺い知れる。その状況は周りのスタッフも感じていたらしく、グリーン・ジョーンズは『GET BACK』の収録曲としてこの日の演奏を選んでいる。既に完成していたこの曲は未だしも、未完成の'[Dig A Pony](#)'と'[I've Got A Feeling](#)'もこの日の演奏を採用しているのは驚きである。現場に居たスタッフとして(!)、余程、印象的な1日だったのだろう。

ジョーンズは[シングルでは1/2 8](#)の演奏を使っているが、[アルバム用には1/2 2](#)を選んだのは上記理由ではないかと思われる(本人が語っていないので永遠の謎となりそうであるが)。

なお、『GET BACK #2』では左右を反転しただけで、全く同じ(日の)ミックスを使用している。

ベーシック・トラックは69/1/28

ポールとジョージのボーカル・トラックを消して、ジョンとポールがボーカルを入れ直している。このボーカルは主に前半で使われており、後半のジョンのボーカルはオリジナルのままである。

なお、消されたボーカルはステレオ・バージョンの左に配されているキック用マイクが微かに拾っているのを確認できる。

聴き比べ表

リマスター・ステレオ (PAST MASTERS)	比較 音源	69/1/28バージョン (THIRTY DAYS Disc 11) 1 7 曲目
		0'00"
		0'00"~0'03" : カウント
0'00"	0'00"	0'03"
0'05"~ : ジョンとポールのボーカル(別テイク)		0'08"~ : 3人のボーカル 0'10"~ : エレピがオフ気味
0'30"	0'30"	0'33"
1'00"		1'03"
1'20"~1'45" : Bメロにジョンのボーカルを追加してWトラックにしている	1'00"	1'23"~1'49" : Bメロはシングル・トラック
1'30"		1'33"
1'46"~2'08" : サビのジョンのボーカルはオリジナルも追加してWトラックにしている	1'30"	
2'00"		2'03"

2'10"～2'35"：Aメロのジョンのボーカルはオリジナルを使っている	2'00"	2'23"～2'39"：ポールのコーラス ("She done ～ me good.")
2'30"		
2'39"～：サビ以降のジョンのボーカルはオリジナルを使っている	2'30"	2'34"
3'00"		
3'06"～：ジョンとポールが追加したアドリブ・ボーカル	3'00"	3'04"

マーティンは関与せず！？

グリーン・ジョンズがエンジニアとして記録されていたことで、加えてレイソン氏もジョンズの証言を取ってなかったことで今までは実態が掴めてなかったようだ。

‘Get Back’の再ミキシング（4/7）の状況からも、オリンピック・スタジオではジョンズが実質的にプロデューサとしての役割も持っていたようだ。シングル・リリース時にプロデューサとしてマーティンのクレジットが無いのは実態を反映させたからと考えられる。

後年の各種リミックス

『LET IT BE... NAKED』

フィル・スペクターは‘Don't Let Me Down’をアルバム収録から外したが、ここではルーフトップの2テイクを編集して復活させている。これにより今までカットされていたジョージのコーラスも聴くことができる。

ルーフトップでの演奏は翌週2/5(水)にステレオ・ミキシングが行われているものの未発表となっており、『NAKED』はこれを振り出しに戻ってやり直したという位置付けのようだ。ルーフトップ1回目をメインとして2回目を部分的に使用している。1回目の演奏でジョンが歌い損ねて適当な歌詞で歌っているのを映画でも確認できる。この箇所を中心に(2'00"過ぎ)、15秒間を2回目で差し替えている。

また1回目の演奏では、ジョージが1'25"付近のリフを弾き損ねている。この区間の中でも特に無音になってしまう箇所には別の箇所からコピペ(差し替えではない)してリフを補完している。

聴き比べ表

『NAKED』	比較音源	ルーフトップの1回目 (THIRTY DAYS Disc 14)
-------------------------	----------------------	---

		6 曲目
<u>0'00"</u>	<u>0'00"</u>	<u>0'00"</u> 0'00"～0'11"：スタジオ・ノイズ ～ カウント
<u>1'18"</u> 1'26"～1'28"：ギター・リフ の 3 拍目裏から 4 音を補完	<u>1'18"</u>	<u>1'30"</u> 1'38"～1'40"：ギター・リフの 3 拍目裏から 4 音を弾き損ねている
<u>1'59"</u> 1'59"～2'14"：全体が別テイク	<u>1'59"</u> 1'59"～2'14"：ギター・リフ から "And ～ me good"	<u>2'11"</u> 2'11"～2'26"：全体が別テイク
<u>2'14"</u> 2'14"～：全体が一致	<u>2'14"</u>	<u>2'26"</u> 2'26"～：全体が一致

<u>『NAKED』</u>	<u>比較音源</u>	<u>ルーフトップの 2 回目</u> (THIRTY DAYS Disc 14) 1 7 曲目
<u>0'00"</u> 0'00"～1'59"：全体 が不一致	<u>0'00"</u>	<u>0'00"</u> 0'00"～0'14"：スタジオ・ノイズ ～ カウント 0'14"～2'13"：全体が不一致
<u>1'59"</u> 1'59"～2'14"：全体 が一致	<u>1'59"</u> 1'59"～2'14"：ギター・リフか ら "And ～ me good"	<u>2'13"</u> 2'13"～2'25"：全体が一致 2'25"～2'28"：ポールのハモリ以 外が一致
<u>2'14"</u> 2'14"～：全体が不 一致	<u>2'14"</u>	<u>2'28"</u> 2'28"～：全体が不一致

‘Fly On The Wall’

GET BACK SESSIONのアウトテイク集であり、1/2 と 1/6 の様子がピックアップされている。

1/2 に行われたのはリハーサルと言うより作曲工程で、以前ならどちらかの自宅で行っていたような最後の仕上げといった作業である。後に‘Sun King’に発展するアルペジオはこの曲のイントロ用にジョンが検討していたものであるのが分かるが、ジョンは早々に曲に合わない判断している。

その後、ポールはBメロの歌詞を提案したり、サビの不要なメロディの削除を行ってい

る。翌日からが本来のスタジオ作業で、1／6には[Aメロに掛け合いコーラスを加えよう](#)と試行錯誤している。

これらを鑑みるに、「作詞を手伝ってないと思うし、ジョンの曲だ。」とするポールの発言は貢献度をかなり控えめに評価しているのが分かる。

2009リマスター

1分9秒、他でシンバル補正（3拍目裏～4拍目表に左chのシンバル追加・補強）が行われている。3連符に聴こえていた箇所に2音追加された事で、16ビート系のリズムになっている。

参考（1'09"、1'15"、1'53"、1'59"、2'05"、2'46"、2'52"、2'58"）